

## 水稲苗の生育状況と田植時の注意事項

### 1. 水稲苗の生育状況

本年は5月に入り気温が上向いてきたものの、4月が低温で推移したため、初期管理には苦慮されたことと存じます。このため、発芽後の不揃いや苗のマット形成がやや弱い傾向にありましたが、その後は概ね順調に推移しております。一部で田植えが始まってきましたが、つぎの点に注意して田植え作業を迎えてください。

### 2. イネミギワバエ(イネヒメハモグリバエ)

県病虫害防除所の発生予察(4月上旬～中旬の気温経過と、その後の1か月予報を参考)では、越冬世代成虫の発生は、平年並みの代かき作業中である5月上旬と見込まれているものの、4月下旬も低温で経過したことから警戒が必要と思われます。育苗箱にパダン粒剤を使用されている方等は、田植え後の経過を注視し、食害が見られた場合はトレボン粒剤を2～3kg/10a散布してください。

### 3. 田植時の注意事項

①品種毎の植付株数及び植付本数については、下の表を参考にしながら田植作業にあたってください。

品 種 名	植付株数(坪当り)	植付本数(株当り)
あきたこまち、たつこもち ちほみのり	60～70株	4～5本
ゆめおぼこ、萌えみのり きぬのはだ、ときめきもち	60株	3～5本

- ②田植後、強風日が続く場合は、深水管理を心がける。  
 ③もみ枯細菌病に感染している苗は、本田に植えずに苗の段階で処分する。  
 ④苗立枯病に感染していても症状の軽い苗は早目に本田に植え付ける。  
 ⑤補植苗を長く置いた圃場ほど葉いもち病の発生が早く、多い傾向にあるので、補植苗は補植が終了次第速やかに処分する。

### 4. 弁 当 肥

田植え1～2日前に1箱当りN成分量で2～3gを育苗箱に散布する。

硫酸(細粒)の場合………現物量で1箱当り9～14g 1袋(20kg)で 1,400～2,200箱分  
 尿素(細粒)の場合………現物量で1箱当り4～7g 1袋(20kg)で 2,800～5,000箱分

また、「苗箱まかせ」のみを基肥で使用する場合は、「LPコート30」を1箱当り現物量で50g(1袋10kgで200箱分)を田植3～5日前頃に育苗箱上に施用すると初期生育量確保につながります。

### 5. 実生苗対策と初期除草剤(田植前処理)の使用

昨年と異なる品種を作付する場合は、実生苗の発生による異品種の混入が懸念されますので「サインヨシフロアブル」を散布し、実生発生予防に努めてください。

また、代かきから田植えまでの期間が長く、初期雑草の発生量の多い圃場については、つぎの初期除草剤を参考にしてください。

薬剤名	成分	使用時期	対象雑草	10a当り 使用量
メテオフロアブル	1	代かき後～田植7日前まで または 田植直後～ヒエ1葉期まで	ヒエ、ホタルイ	500ml
サインヨシフロアブル				
テマカットフロアブル	2	代かき後～田植7日前まで または 田植直後～ヒエ1葉期まで	コウキヤガラ クログワイ	
クリアホープフロアブル			ヒエ、ホタルイ 表層剥離	

### 6. イネミズゾウムシ・イネドロオウムシ・いもち病の予防対策(播種以降)

薬剤名	使用時期	1箱当り 散布量	1袋当 り箱数	包装 単位	病害虫
フェルテラ箱粒剤	播種時～移植当日	30g	33	1kg	害虫
プリンス粒剤	移植3日前～ 移植当日	30g	33	1kg	
※ オリゼメート粒剤	移植3日前～ 移植前日		333	10kg	苗いもち病
ルーチン粒剤	播種時～移植当日		33	1kg	いもち病
Dr.オリゼプリンス粒剤6	緑化期～移植当日	250g/10a	500g		いもち病 害虫
側条パダンオリゼメート 顆粒水和剤(劇物)	田植時にペースト 肥料と混和使用				
側条オリゼメートフェルテラ 顆粒水和剤					
側条オリゼメート顆粒水和					いもち病

※ オリゼメート粒剤については、6月末頃までの効果しか得られません。

◎ ハウス周辺等に除草剤を散布する際は、近隣ハウスへの飛散に十分注意してください。